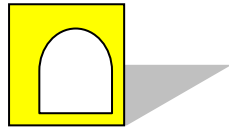


日吉台地下壕保存の会会報



第114号

日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕を指定文化財に

大西 章(日吉台地下壕保存の会会長)

年が明けてから一カ月が過ぎました。昨年末は特定秘密保護法が強行採決され、首相の靖国神社参拝、そして今年に入り沖縄名護市長選で普天間基地辺野古移設反対を公約に挙げた市長の当選の2日後に移設の作業を進める決定、また集団的自衛権を今年のうちに採決しようなど日本を戦争を出来る国に向けた準備が着々と進められています。

日本国憲法は人権尊重主義、平和主義、国民主権主義を挙げ、国家から個人を守るためにあります。人は生まれながらに生命・自由・財産の権利、すなわち「自然権」をもっており、これを守るために市民は契約によって政府を作り、この契約を守らない政府に対して市民は抵抗する権利を持っています。

しかし、最近は国家が市民に義務を負わせ、権利を縮小させ、政府の意思を反映した社会を形成する方向に進んでいます。まさに国家が主導した戦前の社会に戻ろうとしています。アジア太平洋戦争を経験したことで、それをなんとか克服して個人を尊重した平和な世界を目指そうとしていましたが、反対方向に進み始めました。

日本は人権を尊重する国ですから、個人一人ひとりの自由に考えをもつことが許されます。また、それが基本的で重要なことです。一人ひとりが戦争を考えるときにいろいろな本や資料があり、その時代の歴史を学び、考えることが出来ます。しかし、それは大局的なことで、戦争の時代に生きていた人たちの考えや悩みを十分に学ぶことは出来るでしょうか。当時の社会の中で個人が何を考えて、そして戦争に向かったを。当時の人が残してくれた文章や写真、また戦争遺跡を前にして戦争を考えることも大切なことと思います。一人ひとりの考えを原点として、自分が生きている社会のこと、他の社会で生きている人のことをいろいろな人たちと議論することは重要です。

今回の会報は戦争で亡くなった一人の学生を通して、また戦争を「語り部」である地下壕の見学を通して、一人ひとりが戦争を考えてもらう特集としました。

会報110号でお知らせしましたように地下壕出入口の1つが壊されました。この破壊を中止させるには地下壕を文化財指定するしかありません。一人ひとりが戦争を学べる場としてのこの地下壕保存運動を一緒にやりましょう。

目次

指定文化財に向けて(大西章)	1p
特集 学徒出陣 70 周年特集 上原良司を中心として	2~11p
「死んでも靖国神社には居ないから、天国にいるから」と逝った兄 (上原登志江)	2~3p
上原良司の遺書母校に戻る(白井厚)	3p~5p
上原家資料の可能性(都倉武之)	5p~6p
特攻隊員上原良司の永別の六十七日間(亀岡敦子))	6p~8p
あゝ祖国よ恋人よきけわだつみのこえ上原良司」を読んで (小山信雄)	8p~9p
特攻を伝承するということ(阿久沢武史)	9p~10p
早稲田大学の学徒出陣(佐藤宗達)	10p~11p
お知らせ 第9回公開講座『世界の平和思想と日本の現状』	11p
見学会感想 地下壕を見学して (壺岐祐哉)	12p~13p
日吉台地下壕からみる「太平洋戦争」(田村匡史)	13p
報告 日吉フェスタキャンパスウォークのガイド (小山信雄・佐藤宗達)	13p~14p
連載 日吉第一校舎ノート(2) 日吉開設まで(阿久沢武史)	15p
活動の記録	16p

学徒出陣70周年特集 上原良司を中心として

日吉台地下壕保存の会の会報は、会の行事内容や、横浜・川崎平和のための戦争展あるいは、戦争遺跡保存全国シンポジウム参加報告などを中心に、多彩な書き手と資料掲載の多さが特徴といわれています。2013年は「学徒出陣」から70年目で、新聞もテレビも多くの特集をくみ、その実相を伝えようと努めました。また宮崎駿という最も影響力のあるアニメ作家の「風立ちぬ」や、「永遠のゼロ」という大ベストセラーの映画化など、去年は特攻隊になぜかスポットライトが当てられました。特攻隊員には多くの学徒兵がいたことから、学徒出陣と特攻隊が伝説化される危さも感じられます。

会報114号では、『きけ わだつみのこえ』(岩波文庫)に「所感」と「遺書」が掲載され、学徒出陣し特攻死した塾生「上原良司」の特集を組みました。上原は情緒的に扱われ、事実のみを伝えるという作業がほとんどなされていないことに、私は危惧を抱いています。上原良司は「散華ではなく戦死」であり「英霊ではなく戦死者」であり、「偶像ではなく人間」であることを確認するための特集です。

※上原良司の写真は上原家よりお借りしました。

亀岡敦子(運営委員)

「死んでも靖国神社には居ないから、天国に行くから」と逝った兄

上原登志江(上原良司令妹)

「地下壕保存の会」会報に「何か書いて」との、保存の会の亀岡さんからのお話に、再びあの様なことがおこってはいけないと言う思いをこめて、平穏な一家族があゝの戦争に巻き込まれた今までを皆さんに知って頂こうと書きました。一九九六年「横浜・川崎平和のための戦争展」に上原良司が出撃前夜に書いた「所感」をはじめ、軍服などの遺品展をして頂いてから、折々に兄をとりあげて下さった出逢いから今日までを振り返っております。



安曇野の上原家の前 川遊びに行く
兄妹 (S12~3年夏休み)

左から清子・龍男・青木房子(従妹)・良司・登志江。妹たちを守るように歩く2人の兄も、ファインダーから見守る長兄も戦死した。

父母兄三人妹二人のごく平凡な幸せな家族が、あの戦争の時代を経て敗戦を迎えるまでと、それからの七十年、私も八十二才で亡くなった母の年齢を越えてしまいました。その年月は遠く、又、昨日のようにも思い出されます。戦中は、兄二人の死もお国の為に命を捧げたという思いに支えられていたのに、あの八月十五日の敗戦の日は、十五才の女学生の頭の中は真先に、「兄達の死は何だったのだろう」という思いで一杯でした。何故かその日の青空と庭のひまわりの花が忘れられません。

でもその時は、ビルマに居る長兄の生死はまだ分からず、生きていてと願いながら、ラジオで毎日放送される復員者の名前の中に、兄の名前を聞くのを待ち望んでいました。しかし間もなく、その家族の元に軍医だった兄の遺骨を抱いて、当番兵の方が来られたのです。

重なる悲しみに、父母と、妹二人は兄達のことを話すこともなく、それぞれの心の奥深くに閉じ込めてしまいました。後になってわかるのですが、家族の前では悲しみを語らなかった父母は、私の知らないところで、長兄の死後の義姉の身の振り方とか(子供はいませんでした)、後を継ぐべき男三人を失ったこれからの我が

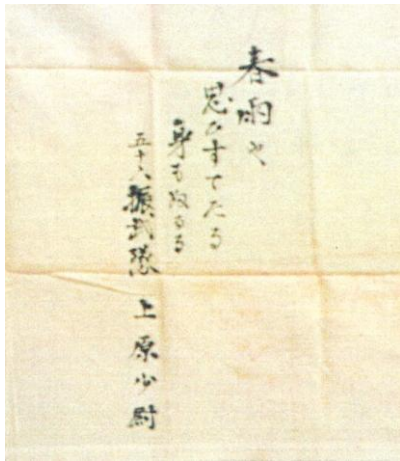
家の行く末を、考えなくてはならなかったのですから、大変な戦後だったと思います。昨年、戸籍謄本をとり寄せてみましたが、兄達三人が大きな「×」印になっていて、親が子供の死亡届を出さなければならぬ悲しみに、胸が痛みました。

私は昭和五年生まれ。小学生で支那事変（日中戦争）が始まり、それから終戦の昭和二十年まで戦争ばかりの世代です。いざという時は神風が吹くとまで信じて、「欲しがりません勝つまでは」と軍艦マーチに始まるラジオの戦勝ニュースに心躍らせていました。

戦死すれば神となり靖国神社に奉られるのを最高の名誉と教えられ、駅に通じる我が家の前の道を、日の丸の旗の行列に送られどれだけの方が戦地に向かったことでしょう。

そんな昭和二十年、最後の別れ（家族は別れを知らず）に帰省した兄良司が、私に何気なく「死んでも靖国神社には居ないから、天国に行くから」と言ったのです。心ならずお国の為にと駆りだされて死んだ人達も、神となって奉られるのを望んで死んだのでしょうか。皆懐かしい故郷の父母の元に帰っていると思うのです。

学問の道半ばで軍隊に、そして特攻隊としての過酷な訓練の中で自由主義に目覚め、国家のあり方に疑問を抱き、敗れることを自覚しながら、別れに訪れたお世話になった家に「春雨や 思ひすてたる 身もぬるる」とハンカチに書いて征った兄。帰る燃料も持たず爆弾を抱えて飛び立ってから死までの時間を考えると、出撃した日が暦から消えて欲しいとまで思うのです。



良司の遺詠が書かれたハンカチ(S20.5.2夜)

調布飛行場から知覧基地に発つ前夜、吉祥寺の竹林家を訪ね、辞する際にハンカチに筆を走らせた。後年、竹林氏が沖縄への慰霊の旅に持参し、雨にぬれて変色したもの。

調布飛行場に出撃の飛行機を受け取りに来た兄に、面会に行った当時東京にいた姉が、特攻に飛び立つ仲間の皆さんの雑談を書き留めていました。「このままアメリカのニューヨークに飛んで行きたい」「線香なんかよりキザミ煙草で焼香して貰いたい」などと話していたそうです。宇宙に人間が滞在し、無人飛行機が飛び、外国旅行も当たり前、望めば世界中の食べ物が口に入る今、できることなら戦争で命を絶たれた人々に、この日本を一目見せてあげたいと思います。

戦争を知らない若者達、その親も知らない戦争。特攻精神を讃美したり靖国参拝を支持する人も多いと聞いたりすると、特攻出撃を安全な地下から指令していた今に残る地下壕などを、自分の目で見学する事とか、あの時代を生きた人や本などから、戦争の実体を勉強して貰えたらと思うのです。

尊い多くの犠牲の上に勝ちとった平和憲法を守っての「戦争をしない国」、今まで他国の人を殺すこともなく殺されもせず過ごすことができた幸せを、あらためて振り返っております。もし戦争という事態になったら、父母は、兄弟は、我が子とは、身近かなところから思いを廻らせ、まず家族の小さな幸せが奪われてしまうことに気付いて貰えればと思います。北アルプスの

の懷に抱かれた故郷の、村の名前でもあった有明山の整った姿が、戦争という激動の時代の何もかも包みこんで、昔と変わることなく美しくそびえているのを見ると、懐かしさの前にまず涙が溢れます。

兄良司が書き残した「所感」に、多くの方々が共感して下さり、慶應義塾大学の白井厚先生をはじめとして、日吉台地下壕保存の会、母校松本深志高校と慶應義塾大学、故郷池田町の兄の碑を守る会など多くの方々との繋がりに、今日まで励まされて参りました。そして、天国に居る二十二才のままの兄の笑顔が目浮かぶのです。

上原良司の遺書母校に戻る

白井 厚(慶應義塾大学名誉教授)

慶大経済学部白井ゼミ(研究会)は1991年から三田で「太平洋戦争と慶應義塾」という

共同研究を始めたが、これは、日本で個別の大学における「戦時大学史」の重要性を認識し最初の総合的研究だった。

開始と共にマスコミの注目するところとなり、当時は健在だった戦争体験を持つ大先輩たちからは、戦時の学生生活や軍隊生活を語る書物や軍用品や資料がたくさん寄せられた。そこで、ゼミは図書館と協力して毎年夏の2か月間、「塾員の著作に見る太平洋戦争」、「塾生たちの『学徒出陣』」などの展示を三田の図書館で開催したのである。

94年には「特攻50周年」という展示を企画、特攻作戦で戦死した人の中には『きけわだつみのこえ』の冒頭に位置する塾出身の上原良司氏がいるので、その遺書や遺品を是非図書館で塾生たちに見せたいと考えた。そこで7月にゼミ生数人と長野県安曇野市穂高の上原家を訪れ、希望を述べて良司の妹清子さんと懇談、貴重な文書や遺品などを見せて頂いた。

こうしてこの年上原家から良司の写真、学生証、愛読書、写真機、日章旗、軍服、手帖、「遺書」「所感」などが運ばれ、次のような展示が実現したのである。

◎8月8日～9月24日 「特攻50周年」慶大図書館（新館）にて

白井研究会主催 慶大三田メディアセンター後援

内容は特攻の概略、戦死者の紹介、遺書などの展示、
沖縄戦の概略など。

ただし下記の期間、この展示は規模を拡大して有楽町に移動。

◎8月18日～21日 「特攻50周年—戦時下の青春—」

有楽町の朝日新聞記念会館（マリオン）11階Bスクエアにて

特操会・少飛会・甲飛会・白鷗遺族会・全日本ろうあ連盟などが後援

この会場は慶大の図書館展示ケースに比べると格段に広いので、日吉台地下壕関連の展示と、日本女子大、東京女子大、御茶の水女子大、跡見学園から戦時下の学生生活を示すような資料を借り出して、「戦時下の女性たち」というコーナーを作った。

この展示は都心の会場で、また特攻隊を扱った映画「月光の夏」と併せたため、4日間で3050人が入場、30分待ちの盛況で、入場料200円を支払った客だけでも1200人と報告されている。

こうして三田と有楽町で行われた「特攻50周年」展は、この年類似のイベントがなかったためか新聞・テレビ・雑誌などでも取り上げられたが、この展示の中心は特攻死した若者たちの悲劇を語る資料であり、中でも上原良司の「所感」と「遺書」の実物であった。おそらく、これが故郷長野県を越え東京に来たのは初めてだったろう。文庫本の活字では伝わらないしっかりした筆跡、緻密な構文、強烈な批判精神、自由の渴望、家族愛、恋愛など、直筆が示す文字の迫力に、多くの人はいしばしその場を動くことが出来なかった。

展示場には投書箱を置いたので、当時の反響の例を両会場から一つずつ紹介する。

《三田にて》

偶然にも、私は数週間前に『きけわだつみのこえ』を読んで、同世代の学生として身につまされる思いをしていた。彼らが死んで後、ほんの30年後に生まれた私達が、今こうして三田キャンパスを闊歩していることに、時代の重さと人間のはかなさを改めて感じていた。

ついこの間感銘を受けた書の原稿が目当たりでできるなんて、同じ塾員として何かを伝えて頂いた気がした。

女子学生・佐々木さん



慶應大学図書館（三田）に展示された
良司の遺書と遺品（H6.8）写真白井厚氏提供

《有楽町にて》

I am grateful that as an American, I live in a time when my country is at peace with Japan.
May we learn from the bravery and self-sacrifice of those young soldiers that war is not a
solution for anything. 37歳・アメリカ人

「所感」と「遺書」の実物は、その後数回日吉台地下壕保存の会及び白井によって日吉と三田のキャンパスなどで展示された。また慶應義塾創立150年に際しては、義塾による大規模な「未来をひらく福沢諭吉展」(東京・福岡・大阪で開催)が開かれ、福沢没後の重要な史料として、「所感」が戦死した若者の希に見る貴重な叫びを後世の人に伝え続けたのである。

上原家資料の可能性

都倉武之(慶應義塾大学准教授)

上原家の資料調査を本格的に始めて4年になる。

慶應義塾の歴史編纂を担当する福沢研究センターで、調査を行うきっかけとなったのは、2009年に開催された慶應義塾主催の福沢諭吉展に上原良司の「所感」を展示させていただいたことである。この展覧会では、福沢没後も含めた慶應大学の歴史の展示コーナーを設けたので、上原良司という一人の塾生を通して、戦時下を語らしめることにしたのだ。展覧会の実行委員の一人だった筆者は、保存の会事務局の亀岡敦子さんのお骨折りで、良司のすぐ下の妹上原清子さんをご紹介いただき、展示を実現することができた。



東京の写真館での記念写真

左から良司・母・龍男(S17年秋~18年春)
龍男は17年9月医学部繰上げ卒業し海軍軍医となる。18年10月22日潜水艦い号で戦死。良司は学徒出陣壮行会の翌日戦死を知る。長兄良春は15年春より陸軍軍医となり、新京や台湾で勤務していた。

これをきっかけとして、上原家に膨大な遺品が残っていることがわかってきた。良司一人分ではない。同じく慶應義塾に学び、そして戦死している長兄良春(陸軍軍医)、次兄龍男(海軍軍医)の兄二人の遺品でもある。しかも3人分が隔てなく桐ダンスに整理されていた。有名で問い合わせも多いであろう良司のものだけが特別扱いされてはいなかった。親族には当たり前のことであろうが、その当たり前に気づかなかったことを恥ずかしく思った。そこで、この膨大な資料を、3人セットのままで目録化し、保存のお手伝いをさせていただくという慶應のプロジェクトが2011年から本格化し、現在に至っている。

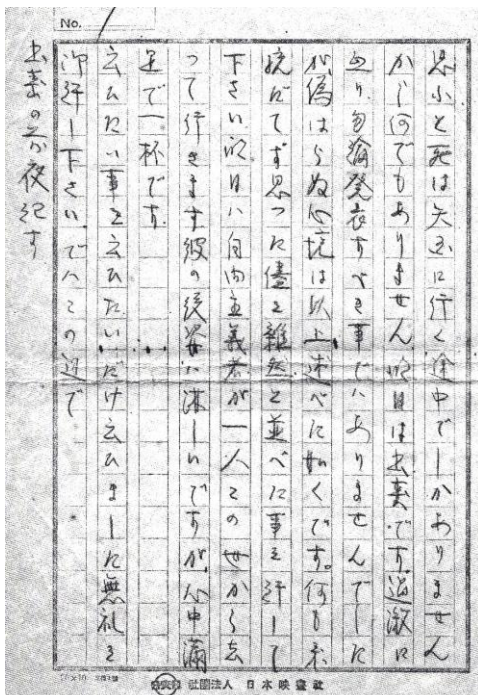
「所感」は、この膨大な遺品中の一つであり、良司は一家にとって戦死した三兄弟の一人なのだ。どうもそういった現実感、もっと平たくいえば、ナマナマしさが、本の数ページに収まった「所感」からは感じられない。その文面を追うだけでは、良司は遠く、そして時代からはみ出した超人のように思われがちである。つまり良司を、あるいは「所感」を過度に特別視してしまうと、実はあの時代のことを「考える」ことも遠ざけてしまうのではないかと考えるようになった。等身大の、人間臭い上原兄弟を資料によって伝えていくことで、「所感」は初めて現代人の、特に学生の視線にも下りてくると考えたのだ。

上原家に残っている資料の内容を例示してみよう。まず一番目立つのは、受験勉強時の計算用

紙だ。3 兄弟とも受験勉強では大層苦勞したらしく、大量に残っている。驚くほど大量に。実はこの資料整理に着手したとき、最初に手を付けた箇所がたまたま計算用紙で、率直に言って辟易したほどの量である。

父親譲りで謹厳実直な性格だったらしい長兄良春の資料としては、小学校時代から真面目一本な印象のノートや授業課題ばかりが残っている。それだけではあまり親しみが湧かないが、慶應医学部での学生生活や、上原家の日常を写した膨大な写真が、良春の感性をよく伝えている。特に弟妹や近所の子どもたちに向ける優しいまなざしは印象深い。

次兄龍男は、親族の証言では誰よりも面倒見がよく、人を楽しませるのが好きだった。その人らしく、弟や妹に見せるための自作の戯画がたくさん残っている。その中で弟の良司は、チョコレート好きの泣き虫として描かれている。高峰三枝子の大ファンで、横顔の似顔絵がたくさん書かれた紙切れもある。寮の仲間が署名した日の丸には「上原三枝子」という名が混じる。おそらく、誰かが冷やかに書いたのであろう。



「所感」原稿 7 枚目 出撃の前夜報道班員高木俊朗氏に託す(S20.5.10)

遺書までも検閲される軍隊内で、報道班員の私物は検閲されないことを知り、感じるままを記すことができた。真情を原稿用紙 7 枚に書き残し、戦死後高木が家族に届けた。

良司の遺品は、他の兄弟に比べて落書きが多い印象を受ける。ノートの後ろの方のページにはよく戦闘機が飛び交っている。大海原を進む巨艦を描いたものもある。そういったノートへの向き合い方(?)が転じてか、誰よりも率直に青臭く自分の考えをノートにぶつけることがあったようだ。時に自分を激励する言葉が大書されたりしている。これらの延長にあの遺書や「所感」があるといっても過言ではないだろう。

以上のように、一見歴史の大河からは全く無用に思える個人的な資料が、実は本当にその人たちが生きていた証である。こういった「些細な」ものが失われた時、彼らが生きていたという事実は、とたんに遠くなってしまう。

筆者は、戦争の時代を伝えるためには、このようにごく個人的な資料を、より多様に、より重層的に残すことが重要だと思う。そして、それらと向き合い、考える場を提供していくことができないだろうかと考えている。定評ある文献を読むことも重要だが、それは他人が考えた結果に過ぎない。人はそれに納得すると自分で考えることをやめてしまう。一人一人が当時を、より自分に引き寄せて考え続ける営みが、特にこの戦争の時代については必要なのではないだろうか。上原家の資料は、重いが意義深い課題を、将来にわたって提供し続けてくれると信じている。

特攻隊員上原良司の永別の六十七日間

亀岡敦子(運営委員)

アジア太平洋戦争での特攻戦没者は約 6 千人ともいわれているが、当時の陸海軍とも正確な人数を把握していない。その中には多くの出陣学徒がふくまれているにもかかわらず、彼らの母校の多くも、個々の学生の軍歴を把握しているとはいえない。特攻出撃のためであろうことは容易に想像されるような理不尽な訓練を、不条理の極みのような軍隊で受けながら、彼らはどんな想いを抱き、何処でどうして最後の日々を過ごしたのか。

彼らのうちの一人、慶應義塾大学経済学部出身の上原良司が書き残した日記や、戦後編まれた同期生の文集、そして良司ゆかりの人びとへの聞き取りから、「特攻要員」となってから、出撃直前までの2ヵ月間の行動を、大まかに把握することができた。22歳8ヶ月の青年が、ど



特攻機「飛燕」に乗る良司 調布飛行場での出発の日を待つ(S20.4)

のようにして「決められた死」に向かい合い、その日までを過ごしたのか、できる限り詳細に記したいと思う。

特攻要員となる

上原たち陸軍特別操縦見習士官2期生(特操2期とよばれた)約千人は、1944年2月から神奈川県厚木の熊谷陸軍飛行学校相模教育隊で最初の教育を受けた。その後数ヶ所に分れたが、上原は最も過酷なコースを辿ったようだ。3月24日から7月20日迄は群馬県の館林分教場、卒業後の短い故郷での休暇ののち、鹿児島県知覧へうつり、同期生136名が第40教育飛行隊で訓練を受けたが、ここでは手紙も日記もメモさえ残していない。

44年12月1日にその中の80名が、背振山のふもと佐賀県目達原の第11練成飛行隊に転属し、仕上げのための飛行訓練をうけた。目達原では、訓練時は集中して行われたが、隊の気風は比較的自由であつたらしく、自由時間に良司は友人とよくテニスをした。基地の「筆生」とよばれる事務職員には、縁故雇用の若い女性も多く、将兵たちとの、ささやかな交流があつたとのこと。良司はその一人からラケットを借りて、白球を打ちながら、安曇野の自宅にあるテニスコートでの兄妹たちとの語らいを、また緑豊かな日吉の蝸谷テニスコートでの学友たちとの時間を、思い出していたのではなかろうか。

1945年3月6日は、特攻の要請をうけ、全員が「志望」とした日であつた。その時の状況は、同期生が2007年に発行した『背振の雲 飛燕の思い出』(私家本)に掲載された原稿から読みとることができた。全員が講堂に集められ、隊長が「諸氏等の中から希望者を募る」と要請をしたのに対し、その時の週番の判断で2区隊に分かれて1時間ほど話し合い、特攻隊になるのも已むを得ないという結論をだした。2人の週番が区隊長室に行き、全員特攻隊を志願致します。人選は区隊長殿に一任致しますと申告し、両区隊長からどうも有難うとの返事があつた。特攻隊員となる経緯は、おそらくそれぞれの状況や時期、隊長や隊員の構成によって異なると思われるが、良司たちが1時間の意見交換後に、結論をだしたというのはいかにも学徒兵らしく興味深い。

その5日後、3月11日は開隊記念日で、運動会や演芸会が盛大に開かれた。仮装行列で女装した友人の後ろに、楽しそうな笑顔の良司が写っている。4月4日、良司たち37名はそれぞれ常陸と明野への転出が決まり、目達原基地の桜並木の花びらを肩に受けながら基地を後にした。そして水戸に着任するまでの短い期間、良司は最後の帰郷をした。

最後の帰郷から出撃まで

当時佐賀県から長野県までは、かなりの時間を要したと思われ、良司はノートに4月5日付けで「東海道車中にて車内の風景(2等車)」と題する短文を残している。その中で或る者は雑談にふけり、或る者は悠々と煙草をくゆらし、——我々が体当たりした後も、幾日かはこういう風景が続くであろう事は、疑いの余地がないと、当事者とそれ以外の人との温度差への違和感を記している。良司が故郷安曇野の有明医院で何日過ごしたか、記録がないが、第一軍装で縁の人びとに会いに行っている。幼馴染で自宅療養中の犬飼五郎は、良司と数時間語り合い、喜んで死ぬものは誰もいないという言葉聞いた。また、松本郊外に疎開していた親戚の青木家は、良司の様子にこれが最後と悟り、麦畑まで見送ったときは、涙が止まらなかったという。そして、ある夜、夕食を共にしていた妹登志江に日本は負けるよ。死んでも靖国神社には行かないからねと語ったので、登志江は誰かに聞かれていないかと、そつと雨戸を開けて外を見たという。

出立の日には定かではないが、父母と妹や近所の人が見送る夕暮れ、「さようなら、さようなら

ら、さようなら」とそれまで聞いたことのない大声で別れを告げて、故郷を後にした。水戸で第56振武隊に編成され、調布飛行場に移り出発のときを待つ。東京では妹清子の通う東京女医専の寮に一度立ち寄り、また清子が調布に面会に行った事もあった。

そしてついに、5月2日雨の夜、良司は馬橋の竹林家を訪れ、明朝発つことを告げ、腕巻き式の磁石を渡した。「こんな大事なものの良いのですか」と辞退すると、「もう要らないから」と首を振ったという。そして求めに応じてハンカチに「春雨や 思ひすてたる 身もぬるる 五十六振武隊上原少尉」と筆で書いた。明3日、竹林母子は面会できたが、安曇野から夜行で駆けつけた母よ志江は、整列した息子の姿しか見ることができなかった。帰宅途中の母とであった登志江は、その時の母の悲しそうな顔が忘れられないという。清子も調布に向ったものの、空襲で電車が不通となり会うことができなかった。何故歩いてでも行かなかったのかと、今でも残念そうに語る。

明野、山口と立ち寄り、目達原上空では表情も分かるほどの低空で翼を振り、残っている友に別れを告げた後、知覧基地に到着して、三角兵舎で数日を過ごす。この間、良司が自分は自由主義者であるとか、日本は負けると、公言していたと書かれた本もあるが、報道班員高木俊朗に託した「所感」にのみ、検閲を受ける心配のないことを承知した上での、しかも出撃の前夜に可能だった真情吐露ではなかったかと思う。5月11日早朝6時30分、沖縄に向け出撃し、9時頃、無線の向こうに体当たりの証しを遺して戦死した。これがひとりの特攻隊員の永別の67日間である。

(白井厚研究会『創世』41号2013より転載)

「あゝ祖国よ 恋人よ きけわだつみのこえ 上原良司」を読んで

小山信雄(運営委員)

昭和20年5月11日早朝、鹿児島県知覧飛行場から、上原良司は陸軍特別攻撃隊「第56振武隊」の一員として沖縄方面に飛び立ち、還らぬ人となりました。長野の中学時代の日記に始まり、特攻出撃前夜の夕食前に報道班員高木俊朗の求めに応じてしたためた「所感」まで、数多くの手記がこの本で紹介されています。軍隊での過酷な生活、軍部・戦争に対する意見などが赤裸々に綴られており、思想・発言が厳しく統制・管理されていた軍隊の中で、よくぞここまで勇気を奮う事が出来たものと、大変深い感銘を覚えました。



庭球部の仲間と日吉マムシ谷テニスコートで。後列左無帽が良司(S17年春～18年秋)
当時の庭球部顧問は小泉信三塾長「練習ハ不可能ヲ可能ニスル 信三」の碑あり

慶應義塾大学経済学部で学生であった上原は、学生の徴兵猶予が停止された昭和18年9月に、最初の短い「遺書」を書きました。同年12月には学徒兵として陸軍に入営し、第二期特別操縦見習士官として熊谷飛行学校で精神的にも肉体的にも過酷な訓練に明け暮れる中、「戦陣手帳」「修養反省録」(昭和18年12月～19年7月)を書き、軍に忠誠を誓う表現をしつつも、鋭く軍部批判を展開しています。特に「軍人精神」に対して「日露戦争当時と違って、今日においては既に精神を以て物質に打ち勝つことはできない。これは今日において万人の認める所である」と。昭和19年7月サイパン島守備隊全滅の前後の時期に、第二の「遺書」が書かれています。日本の戦況も憂慮し、毎日が死を前提としての生活であった為か、むしろ死を積極的に受け入れようという内容で、「全体主義の日本が敗れるのは当然」「人間にとって一国の興亡は重大であるが、宇宙全体から見れば些細なこと。奢れるもの久しからずで、米英が勝ってもいつか必ず敗れる日が来ると思うと痛快」と達観していますが、心中無念な気持ちで一杯だったのだと思います。

昭和20年に入り、戦局はいよいよ緊迫の度を加え、4月に沖

縄戦の特攻隊員に命ぜられ、5.11の出撃の日を迎える事になります。出撃前夜の「所感」には上原の全ての思いが詰まっているようで、特に「一器械である吾人は何も云う権利もありますが只願わくば、愛する日本を偉大ならしめん事を、国民の方々をお願いするのみです」には大きく心打たれました。死ぬこと以外選択枝を許されず、明日の朝特攻に向かおうとしている時にでも、祖国を愛し、残された人々に向かって「日本を偉大にしてほしい」と願っているこの崇高な気持ちに、只々尊敬の念を抱くばかりです。家族や友人を大切に、自由主義に憧れ、世界どこにおいても肩で風を切って歩く日本人像を夢見ながら、世界情勢の冷静な理解の上で軍部の矛盾を鋭く指摘し、厳罰覚悟で日誌に書き続けた上原。一方で、精神論に頼り「一億総玉砕」のスローガンの下、人命無視で本土決戦まで主張してやまなかった軍幹部達の存在を考えると、たまらない気持ちになります。上原の通った日吉キャンパスには、彼の学徒出陣後、海軍軍令部に続き、昭和19年9月には連合艦隊司令部が移転され、空襲の心配の要らない地下壕から、航空機や戦艦に対する特攻命令を発信することになりました。こうした実態を深く噛みしめながら、あの戦争とは一体何であったのかを学び、沢山の人の実相を知って貰いたいと願い、これからもガイド活動を続けてゆきたいと思います。

『あゝ祖国よ 恋人よ きけわだつみのこえ 上原良司』信濃毎日新聞社 (1600円+税)

特攻を伝承するということ

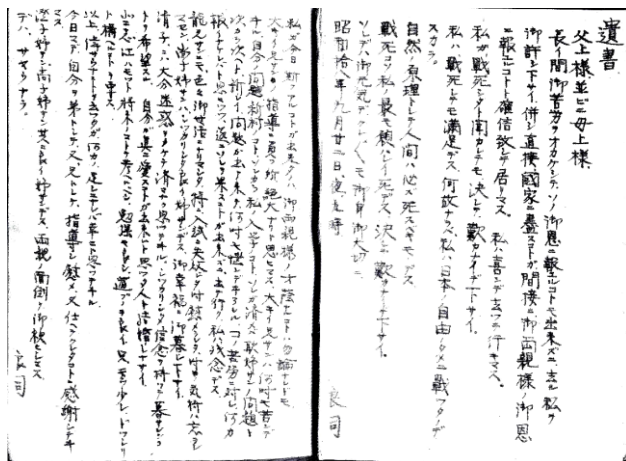
——『MOTHER～特攻の母 鳥濱トメ物語～』を観て——

阿久沢 武史(運営委員)

昨年末の12月14日、新国立劇場で『MOTHER～特攻の母 鳥濱トメ物語～』(脚本・演出／藤森一朗)を観た。鹿児島県の知覧で富屋食堂を営み、多くの特攻隊員から慕われた鳥濱トメを中心とする物語である。舞台セットは食堂だけで、基地からの出撃シーンや突入の瞬間は、最後にスクリーンに映し出される当時の映像を除き、いっさい描かれていない。食堂に集う若い隊員たちの姿を実際書き残された遺稿をもとに再現し、価値観が大きく変わった終戦直後の視点から回想するという構成で、物語が展開していく。

「特攻」をどのようにとらえ、どのように理解すべきなのか、私はその答えを見いだせずにいる。まず第一に「事実」としてあまりにも重く、深い。第二に軽々しい解釈は表面的なイデオロギーの問題に墮する危険性があるからである。作家の保坂正康氏は、『「特攻」と日本人』

(講談社現代新書)において、従来のプラスマイナスの評価や視点を踏まえつつ特攻を客観的に論じているが、問題意識の根底にあるのは上原良司だと言う。高校時代に『きけわだつみのこえ』で読んだ上原の遺稿に「無性に同情の念」がわき、上原のような「自由主義者」がそのような運命を受け入れなければならなかったという事実「怒り」がおさまらず、知覧の特攻平和会館の上原の遺書や遺品のコーナーでは「こらえていた涙」が堰を切ったように流れる。保坂氏が向き合うのは、特攻という歴史



愛読書である羽仁五郎著『クロオチエ』の見返しに書かれた最初の遺書(S18.9.22)学生の徴兵猶予停止のラジオ演説(東条英機)の後記す。またこの本には、文中に丸印をつけた、初恋の人への恋文が綴られている。

的事実を客観的に見つめたいという思いと、特攻から湧き起こる主観的な感情とがせめぎあう自身の内なる矛盾である。実はこれこそが、我々が特攻を考える際に我々自身が抱えている問題の本質であり、これを見つめることなくして論じることは、やはり慎むべきではないかと思うのである。

さて、『MOTHER』の視点は終戦直後という現在にあり、物語は過去の日々だけに終始し

ない。戦後、富屋食堂には進駐軍の兵士が出入りするようになり、トメは抵抗を感じつつも、やがて心に傷を負った若い米兵の世話をするようになる。ここでは敵と味方という境界が不分明になり、特攻隊員と米兵とが戦争に翻弄される若者という立場でひとつになっていく。

「戦争とは、じじいが始めて、おっさんが命令して、若い奴が死んでいく物語なんだ。」

トメは期せずして日米双方の若者から、この言葉を聞くことになる。おそらくここにこの作品の主題があり、「特攻」という限定された世界から離れて「現代」の問題にもつながるメッセージ性があるのだろう。たとえば、昨年末に起こったいくつかの社会的な出来事、特定秘密保護法案の強引な採決、普天間基地の辺野古移設に関する県知事による唐突な承認、安倍首相の靖国参拝など、この国がいま現在抱えている問題の本質は、特攻の時代と何ら変わらないようにも思える。

『MOTHER』の「公演企画書」によれば、その「企画目的」の中に「“特攻”を広く後世に伝えていく事を目的としています。」という一文がある。この点に関して、まったく異存はない。それは現代に生きる我々がやるべき責務でもある。問題なのは、その「伝え方」だろう。客観的な視点で歴史的事実をしっかりと踏まえ、なおかつ感情論に堕さない伝え方とは何か。常に自らに問いかけ続けるべきだと思う。

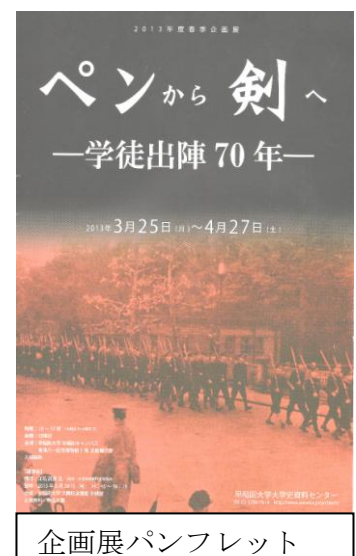
折しも、映画『永遠の0』が上映されている。原作は数年前にベストセラーになった話題作である。零戦が、真珠湾攻撃が、ミッドウエー海戦が、ラバウルが、グラマンとの空戦が、VFXによってリアルに再現され、主人公が特攻に出撃し、突入するその瞬間が、大きなスクリーンに映し出される。最後に流れる主題歌は、サザンオールスターズの歌う「蛍」である。特攻と蛍——その由来は、あらためて言うまでもないだろう。私はこの映画を批判的に論評するつもりは毛頭ない。この映画に涙した自分がここにいるからである。これまでに特攻を描いた物語は数限りなくあり、これからも生み出されていくはずだ。しかし、その多くが「事実」と言うより、特定の型にはまって伝承される定型の「物語」と呼ぶべきものになっている。『永遠の0』のパンフレットには、「60年の時を超えて語り継がれる、壮大な愛」とある。「愛」という言葉が使われた瞬間、問答無用に感情の領域に入り込んでしまう。それが正しい意味での「伝承」なのかということである。

『永遠の0』が海軍の物語である以上、特攻作戦の指示は日吉から出されているはずだ。陸軍の知覧基地の近くにあった富屋食堂には上原良司も通い、トメの回想によれば、上原は食堂にやってくると、「おばさん、日本は負けるよ」と言っていたとのことである（朝日新聞西部本社編『空のかなたに』葦書房）。日吉と慶應は、過去と現在をつないでいる。そうした場で、我々が何を考え、何を語るのか。まずは責任ある言葉で、「物語」ではない「事実」を伝承すべきだと思っている。

早稲田大学の学徒出陣

早稲田大学大学史資料センターは平成25年3月25日から4月27日まで、ペンから剣へ—学徒出陣70年—企画展を開催した。5人の戦没学徒兵を紹介、手紙・遺品等が展示されている。他に文部省の通達、仮卒業証書、寄せ書きされた日章旗、最後の早慶戦の写真、早稲田での出陣学徒壮行会等の写真が並び、最後に戦没者氏名が掲示されている。(1) 近藤清 学徒出陣に先立ち昭和18年10月16日早稲田・戸塚球場(当時は戸塚道場と呼称)にて所謂「最後の早慶戦」が行われた。映画にもなったのでご覧になられた方も多いと思います。近藤は捕手でキャプテンを務め、強打者。一方慶應には別当薫がおり昭和17年春季リーグ戦では打率5割を打つ強打者で首位打者、ライバルであった。また近藤に贈られた日章旗には双葉山、羽黒山などの当時の人気力士の寄せ書きがある。当時のスポーツといえば大相撲、東京六大学野球などで、近藤は花形

佐藤宗達(運営委員)



選手なので書いてくれたのであろう。なお日章旗は戦地で斃れた日本兵から連合軍兵士が戦利品として持ち帰る事が多々あった。そして晩年に悔悟の念にかられ遺族に返したいと申し出があり、立教大出陣没学徒兵の日章旗が遺族に戻った事例もあります。参考記事：平成22年8月13日付 日本経済新聞文化欄一寄せ書き 67年後の帰還―(2)市島保男 平成24年6月の当会の第24回総会時に菊池実氏より「戦争遺跡考古学の現状と課題」の講演があり、その中で米空母バンカーヒルに突入した神風特別攻撃隊第六昭和隊員・早大出・小川少尉の遺品が戦後56年ぶりに遺族の元に戻ってきた。突入された船舶と突入した隊員の氏名、そして遺品が関係者の元に戻ってくることは稀有な事とのこと。興味を覚えマクスウェル・テイラー・ケネディー著「特攻 空母バンカーヒルと二人のカミカゼ」を参照したところ遺品の中の写真に写っていたのは小川少尉の先に飛び立った第五昭和隊員の市島保男を含む4名の学徒兵、あまりの奇縁に思わず足を止めた。(3)昭和18年10月15日、早稲田大学出陣学徒壮行会が行われた。当日の写真が数枚展示されている。大隈講堂前の写真には文学部の関係者が集まり、中央に会津八一教授、左端に「学徒出陣」の幟2本を女子学生が持っている。早稲田では昭和14年より女子学生の入学を認めており、少数の女子学生がおり、それこそ壮行会に花を添えることとなった。因みに昭和23年までの女子卒業生はわずか30数名であった。(4)戦没者氏名 展示の最後に戦没者氏名が掲示されている。その数の多いことに胸をうたれる。説明文を引用「2013年3月現在、早稲田大学の戦没者は4736名を数える。うち学徒出陣以降の学徒の戦没者数は500名を超えると推定される。そして全戦没者の7割近くが、実に1944年以降に集中する。」見学会のガイドでも、もっと早く戦争が終わっていれば多くの学生がキャンパスに戻って来られたはずだ、と云い続けます。

お知らせ

予約は不要です

第9回日吉台地下壕保存の会 公開講座

『世界の平和思想と日本の現状』

～特定秘密保護法、憲法9条などをめぐって～

講師：藤森 研 氏（専修大学文学部教授・元朝日新聞記者）
日時：2014年3月29日(土) 13:00～15:00（開場12:30）
場所：慶応義塾大学日吉キャンパス来往舎2階大会議室
（参加費無料・事前予約不要）

講演内容：安倍政権が『日本を取り戻す。』として、さまざまな施策を打ち出しています。昨年12月には、反対の声を押し切って特定秘密保護法を成立させました。いま、集団的自衛権の行使容認への意欲も明らかにしています。これらは一連のもので、戦後日本の『憲法9条体制』を根底から変えようとする試みです。それは、私たちにどんな社会をもたらすのでしょうか。戦前の言論状況や新聞、国民の意識、20世紀以来の世界の平和思想と憲法9条、日本と似た非武装憲法を持つコスタリカの現地取材経験などをまじえて、一緒に考えていく。

プロフィール：1949年生まれ。東大法卒。朝日新聞社に入り、社会部記者、朝日ジャーナル編集部員、論説委員、編集委員などを経験、連載「新聞と戦争」のキャップを務めた。2010年に専修大学に移り、現在、専修大学文学部教授（人文・ジャーナリズム学科）。著書に『日本国憲法の旅』、共著に『市民社会とメディア』など

見学会感想

地下壕を見学して

慶應義塾高等学校3年 壱岐祐哉

我々戦争を知らない世代は、つい戦争というものを大局的な観点で捉えてしまう。「戦争」とは、国と国との争いであり、その結果国際情勢がこのように変化し、国家間の力関係も動いた、といったように、抽象的なもの、もっと言えば、自分に縁のないものとして戦争は扱われがちである。しかし、地下壕見学を通して改めて、戦争は「人間同士の戦い」なのだということを痛感させられた。一人ひとりの個人が傷つき、死に絶えていった残虐なものであったことを実感せずにはいられなかった。

入ってすぐ、予想以上に歩きやすいことに驚いた。イメージでは、すれ違うのがやっと、というくらいに狭いものかと思っていたが、日吉の地下壕は「防空壕」というより「軍事施設」なのだ、との事前説明の通り、ここを幾人もの軍人たちが歩きまわっていた様子がありありと想像できるほど、広い空間だと感じた。薄暗い空間の中、あの広い空間を歩いていると、なんとほろりと寂しさを覚える。日の光が入らない空間は、それだけで心細いものである。ガイドの方の説明にもあったが、地下壕はまさに「堅牢」という言葉が相応しい、厚いコンクリートで頑丈に造られた施設であり、それだけで圧迫感を覚えるほどだ。ましてや、通信を傍受されまいと地下にもぐり、見えない敵と戦い続け、いつ終わるかわからない苦しみとも戦い続けた人々は、精神を病むほどに傷心していたことだろう。



連合艦隊司令部地下壕 右側作戦室・左側奥通信室

ガイドの方のお話で最も印象に残っているのは、地下壕の中心部に案内された時のことだ。「ここで通信の受信が行われていた」との説明のもと、凄惨な戦場の兵士の状況と、それを受信する人々の様子が、とてもわかりやすく、鮮明にイメージを想起することができた。ガイドの方がこう語っていた。「ここにいた通信兵の方々は、通信を受信している間、涙が絶えなかったそうです」。日吉地下壕は、太平洋での戦い、そして沖縄戦と、史実の通説に基づいて言えば日本が負け続けた時期に使われた施設である。「かつて学校で一緒だ

った者もいただろうそんな仲間たちが次々と戦死していく知らせに、涙が絶えなかったそうです」。想像するだけで胸が苦しくなる話である。戦争を大局的に見れば、もしかしたら、一言、「日本が敗戦した」と片づけられてしまうかもしれない。そして、「あの頃日本兵はおかしかった」と、そう思われてしまうかもしれない。しかし、実際に戦っていた彼らは生身の人間なのだ。彼らも、戦争がしたくてしているわけではなかったに違いない。仲間の戦死の知らせに心を痛め、それでも尚、戦い続けなければならない苦悩や葛藤を、我々は決して忘れてはならないと切実に思った。戦争の時代に生きていた人は現代人とまったく別人で、違う価値観に生き、もはや違う人間だった、という漠然とした思いは、本当に危険だと思う。そして少なからず、そういった思いが自分に芽生えていたような気がした。多くの人は、あの堅牢の地に訪れていただき、その圧迫感、緊張感と共に是非、ガイドの方のお話を聞いていただきたいと強く感じた。

ところで、最後にガイドの方が仰っていたが、日吉地下壕は未だ「史跡」として認定されていないそうである。私はこの事実を非常に残念に思った。今はまだその堅牢さを誇っているものの、戦後60年以上が経過している今、近いうちに修繕が必要になってくることは十分に考えられる。その際、ボランティアの方々の善意だけに頼るのではなく、国家として、この

いわば「日本にとって負の」戦争遺跡にきちんと向き合い、後世に伝えていくことは意味のあることだと心底思う。戦争を身近に感じられる機会は少ない。戦争、という言葉に、数多くの悲しみの感情、涙が含まれていたことを、子どもたちに伝えていく活動に自分も携わっていきたく強く思った。充実した活動になりました。本当にありがとうございました。

日吉台地下壕からみる「太平洋戦争」

慶應義塾高等学校3年 田村匡史

「あの戦争」が終戦を迎えてから68年が経った今、東京にはスカイツリー、東京タワー、六本木ヒルズ、ヒカリエなどなど多くの高層ビルが立ち並び、その間のわずかな道に夥しい数の自動車、自転車、あるいは人々が行き来し、「あの戦争」の影はどこにも見えなくなりつつある。これは東京に限らず、日本全国共通していえることかもしれない。あの沖縄でさえもひめゆりの塔など戦争というものを伝える遺跡は確かに郊外に出れば散在するものの、都市部、中心部に入ってしまうとデパートや免税店、お土産屋が立ち並び、そこに戦争の足跡は見られなくなりつつある。「あの戦争」が歴史の一部と化し始めてきたのだ。

しかし、僕たちが毎日通うこの日吉の地には幸い戦争の足跡が今もなお残されている。僕たちが通う塾高の本校舎ももちろんその1つだ。そして同じ敷地内にある日吉台地下壕もまたその1つなのである。僕たちは今回初めて日吉台地下壕を見学した。

日吉台地下壕—それは太平洋戦争末期、日本が後退戦を強いられるようになった頃に軍の司令部がおかれた場所の1つであった。地下壕全体的な印象は壮大でかつ頑丈というこの二言に尽きると思う。蟻の巣のように地下にはりめぐられたこの地下壕にはいくつかの部屋が見られた。特に印象に残ったのは司令長官室と通信室であった。まず司令長官室は字の如く司令長官の滞在する部屋であるが、他の部屋に比べ広くつくられていた。当時そこに置がしかれていたというのも驚くべき話である。もう1つは通信室であった。ガイドの方々の話によれば、そこで各戦場地から送られてきた暗号、いわゆるモールス信号を受信していたそうだが、戦争末期神風特攻隊が動員されたとき、彼らは信号のスイッチを入れて突撃したので、ツーという音が鳴り続け、敵艦に衝突すると音が切れるということで状況を判断していたそう。その部屋には何か受信者たちのさびしさの声を感じられるような気がした。部屋に限らずこの地下壕にはいくつかの工夫がなされていた。特に印象に残っているのは巨大な空気坑である。O₂濃度が低く今となっては入ることのできない防空壕さえ存在する中で、この地下壕は今でも外界にいるときとさほど変わらず呼吸できる状況にあり、これはまさしくこの工夫のものだと思う。

今回の見学を通じていくつか学んだことがある。(i)戦争が敗北の方向に進んでいたこと(これは地下壕が日吉に作られた時点で明らかである)(ii)戦時中の日本の技術の高さ(iii)軍の司令部の中では戦争はまだ継続しようとしていたことである。特に(iii)については、司令長官室に敷かれていた畳、無数におかれた電灯、巨大な空気坑、丈夫な壁がそのことを物語っている。彼らには民衆を巻き込んでしまっているという実感はなかったのであろうか。

と同時に1つ思ったことがある。ガイドの方々が言っていたように、この大切な負の遺産を残していくことに僕は賛成というか残すべきだと思う。体験者世代がいなくなりつつある現代、戦争というものの恐ろしさを伝え、戦争から得られるものがないことを知らせるものは、原爆を始めとする核兵器でも、ただ事実を列挙した教科書でもない。こうした実物、その当時の遺跡しかないのである。そして、その遺跡を目で見た僕たちは後世に継承していく義務があるのだ、そう実感した。

報告

日吉フェスタに参加してーキャンパスウォークのガイド

佐藤宗達(運営委員)

11月9日、日吉フェスタに参加、テントを一張貰い写真を吊り下げ(特に学徒出陣関係)机に書籍を並べると同時に初めての企画としてキャンパスウォークを1時と2時に試みた。有志で作成した見開きチラシを配り声をかけたところ1時に4名、2時に6名の参加者。

1 時は佐藤、谷藤とでご案内した。午前中に福沢諭吉の胸像の前で予行練習したものの、ぶっつけ本番。(1) 福沢諭吉の胸像、裏の碑陰を見ながらの説明、生誕 150 年、台座にタイムカプセルがあり生誕 300 年(2135 年)に開けるなどで話す事がなくなり早々に切り上げ。三田の胸像にも触れればよかったがいかなせん知識不足。(2) 藤山記念館と藤山雷太像、残念ながら戦前の方で知名度が低く話す方も棒読み。ご子息の藤山愛一郎の話になると通じました。雷太・愛一郎をもう少し消化しないと話せないと思いました。(3) 銀杏並木、見るだけ。いつもの写真があれば植えて間もない様子がわかるのですが。(4) 第一校舎・第二校舎、いつも通りの説明。(5) YMCA チャペル、たまたま開いており管理者にお断りして内部をみせて貰えた。説明書きもあるので当方からの説明は簡単に。(6) 地下壕堅穴抗・弥生式堅穴住居跡、いつも通りの説明ですが地下の見学ポイント 2 の堅穴抗を見てないだけに地上部分の説明も迫力に欠けます。(7) 日吉グランド、平沼亮三の胸像を見ながらの説明、グランドとは連携してないのでちぐはぐ感、先にグランドの説明をすべきでした。「反省と課題」予定通り 50 分で廻りましたが、地下壕との関連付けがうまく出来ず不完全燃焼でした。来年もあるので皆様に討議しましょう。

日吉フェスタに参加して一キャンパスウォークのガイド 小山信雄(運営委員)

11 月 9 日、日吉フェスタに参加し、“ぶら〜り キャンパスウォーク”を企画。日吉台地下壕の展示ブース前を通り掛かる人々に、「13 時と 14 時で 2 回、キャンパス内を案内します！」と声掛け。「今日は地下壕に入れますか？」という質問も度々あったが、予約がないと入れない事を知ると、やや気落ちした様子。なかなか参加者が集まりそうでなかったが、最終的に 13 時の部で 4 名、14 時は 6 名が参加する事となった。最初の回を谷藤さん、佐藤さん、二回目を長谷川さん、小山が案内した。



日吉フェスタ日吉台地下壕テント

二回目のメンバー 6 名は皆現役の学生。内 5 名は東京の某大学生のグループで、実は夕方から日吉記念館で行われる、某有名若手女性歌手のコンサートがお目当てでキャンパス散策中、日吉台地下壕が目にとまり、我々の案内の結果参加することに。

最初の案内ポイント“福沢諭吉の胸像”では、やはり 2135 (生誕 300 年)に開ける「未来の塾生にたいする提言」に、皆興味津々。黄色い銀杏並木となるには、まだ時期尚早で残念でしたが、80 年前に植えた高さ僅か 3.6m の銀杏の木々がこのように大きくなった事を説明し、一同感動。第一校舎が戦争中に日本海軍や戦後は米軍の施設として使われた戦争遺跡であった事や、当時の軍国主義や軍事教練な

どの説明をし、又、地下壕堅穴抗(巨大キノコ)は、実は地下 30m の地中に張り巡らされた地下壕と繋がっているという話などで、想像を膨らませてもらい、日吉キャンパスに潜んでいる戦争というものに興味を持ち始めて貰えたようでした。

一時間に満たない短いツアーでしたが、3 偉人の胸像の見学のみならず、地上の建造物に限定されたものの、日吉キャンパスに戦争遺跡があることを知ってもらえる事ができて有意義なミニツアーだったと感じます。来年はもっともっと多くの参加者が募れるよう、アイデアを絞り出して行きたいと思います。

連載

日吉第一校舎ノート(2) 日吉開設まで

阿久沢 武史(運営委員)

大正 12 年(1923) 9 月 1 日の関東大震災によって、慶應義塾は甚大な被害を受けた。三田の大講堂や図書館の煉瓦には大きな亀裂が生じ、最も破壊が大きかった塾監局は立て直し

を余儀なくされることになる。義塾は震災復興資金の調達のために塾債の募集を開始し、塾監局の再建を含めた復旧工事を進めていった。これと並行して、三田からの一部移転も本格的に議論されることとなった。大正15年(1925)9月には、曾根中条建築事務所設計によるゴシック様式の新しい塾監局が竣工、塾長林毅陸は『三田評論』同年8月号(第348号)において震災復旧事業の進捗状況を報告しつつ、移転の構想をはじめて公にしている(「三田丘上の復旧及整理」)。

それによれば、この時期の大学生の総数は2937名、大学予科は3392名、加えて高等部・普通部・幼稚舎・商工学校等をあわせると塾生の総数は10892名に及び、医学部はすでに移転していたものの、三田山上は敷地・施設ともに限界に達していた。何より教育課程と年齢が大きく異なる学生・生徒が狭い敷地に混在していること自体、教育的な見地から好ましいことではない。このような理由から、大学以外の諸学校、なかんずく予科の移転が構想されることになった。この点に関し、林は具体的に次のように述べている。

予科は高等中学とも称すべく、教育の程度より云ふも、学生の年齢より云ふも、大人の本科学部と雑然同居せざるを以て、相互の為に得策と為す。若し郊外に適當の地を得て予科を移さんには、青春發育の最盛期に在る彼等中少年の学生に取り、体育上、訓育上、一般教育上、非常に有益であるに相違ない。同時に三田丘上は現在の窮屈と混雑とより救はれ、大学学徒の研究思索に相應はしき場所となり、其の一事直ちに大学教育の上に、偉大なる好影響を与ふるに相違ない。

「青春發育の最盛期」にある青年のために「郊外に適當の地」を求める。ここには現在にまで続く「日吉」というキャンパスの特質と位置づけが、すでに十分に構想されているように見える。ともかくこのような理由と目的で、実際に移転のための準備を始めることになったのである。

この間の事情は、『慶應義塾百年史』中巻(後)の「第二章 日吉建設」に詳しい。昭和2年(1927)12月6日の大学評議会において敷地拡張と設備改善問題に関する特別委員を選出し、翌3年

(1928)5月15日の評議員会で設備改善委員会を設置。ここで「郊外より離れたる所に成るべく

広き土地を買入る」方針を決め、6月19日の評議員会で「主として大学予科を移転する」方針を可決。6月28日には候補地を神奈川県下に求めることとし、横浜市神奈川駅付近の土地を検分している。このような中、8月15日に東京横浜電鉄株式会社(現・東京急行電鉄)から日吉台の土地7万2千坪を無償提供するという申し入れがあり、実地検分のうえで他の候補地を含めて検討した結果、10月16日の評議員会において日吉への移転を正式決定するに至った。その後、義塾が購入する3万6千坪分の土地の地価の確定と買収総額の調整で時間を要している間に、小田原急行電鉄から相模原の土地10万坪の無償提供の申し込みと、箱根土地株式会社から小金井付近の候補地の申し込みがあったが、昭和5年(1930)2月に土地の買収がようやく終了し、東京横浜電鉄株式会社との間に本契約が結ばれた。これによって無償提供分の7万2千坪に隣接の借地1万7千坪をあわせた約13万坪に及ぶ広大な敷地に、新しいキャンパスが建設されることになったのである。この時、もしも他の候補地、たとえば神奈川駅周辺、相模原、小金井が選ばれていたとすれば、日吉の丘の歴史はまったく違ったものになっていたに違いない。

大学のキャンパスとしての「日吉」の事実上のはじまりの日は、義塾が東京横浜電鉄株式会社と本契約を締結した昭和5年(1930)2月8日であると言ってよい。



昭和7年頃の日吉台(慶應義塾図書館所蔵)

★活動の記録 2013年11月～2014年1月

- 11/27 地下壕見学会
慶応義塾高校3年生 28名
- 11/30 定例見学会 51名
- 12/3 地下壕見学会
神奈川区区民協議会委員 24名
会報113号発送(慶応高校物理教室)
- 12/9 運営委員会(慶応高校物理教室)
- 12/14 定例見学会 55名
- 12/17 ガイド養成講座打ち合わせ
- 12/20 地下壕見学会
慶応義塾大学生 歴史吉岡先生 35名
- 1/9 地下壕見学会
日吉南小学校6年生 116名
- 1/11 ガイド学習会(菊名フラット)
- 1/14 地下壕見学会 恵寿友会 22名
- 1/15 戦争遺跡保存全国ネットワーク神奈川川崎大会実行委員会(法政第二高校教育研究所)
- 1/16 地下壕見学会 高田東小学校6年生 60名
- 1/18 第1回日吉の戦争遺跡が「い」養成講座(来往舎中会議室) 保存の会新年会
- 1/23 地下壕見学会 武蔵野市平和事業実行委員会 10名
- 1/25 定例見学会 45名
- 1/27 運営委員会(慶応高校物理教室)
- 1/31 地下壕見学会 あざみ野クラブ 47名
- 2/8 第2回日吉の戦争遺跡が「い」養成講座
(来往舎中会議室) 大雪のため順延



小学校6年生の見学会

★新聞掲載

- 2/7 産経新聞「首都圏ワイド」

★予定

- 2/12 会報114号発送
- 3/29 第8回公開講座(会報114号参照)



- ★定例見学会 2/22(締め切りました)・3/22・
4/26・5/24(土) 11月満開の皇帝ダリア(寄宿舍への道)

☆地下壕見学会は予約申込が必要です。

お問い合わせは見学会窓口まで TEL045-562-0443(喜田 午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町 2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上
発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921
代表 大西章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会
日吉台地下壕保存の会運営委員会